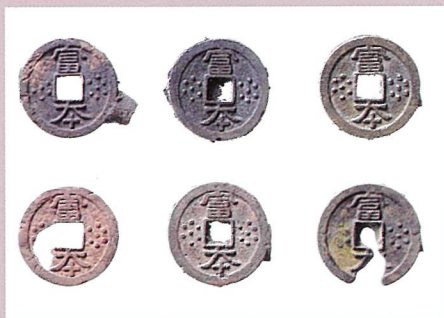


七世紀後半の総合工房の調査

最古の貨幣「富本銭」铸造工房の調査

飛鳥池遺跡は、飛鳥の中枢部に営まれた古代（七世紀後半～八世紀初頭）の工房跡である。わが国最古の本格的寺院、飛鳥寺の東南に接する谷間に立地し、天武天皇の飛鳥浄御原宮とも指呼の間にある。この工房では金・銀・銅・鉄を素材に、仏具や調度品、建築金物や工具、武器などが生産されるとともに、方鉛鉱と石英を原料に国産ガラスの製造が開始され、瑪瑙・水晶・琥珀などと組み合わせて色とりどりの玉類が生産されていた。さらに漆製品や瓦の生産、最古の貨幣



完形に近い富本銭

である富本銭の铸造も確認されるなど、この遺跡が古代の手工業技術を集積した巨大な総合工房であることが判明した。

工房群は、Y字型に延びる谷の兩岸に計画的に配置され、操業時に生じた炭や灰、失敗品、破損した道具類を谷の低地に投棄している。廃棄物層は丘陵の傾斜に沿って順次堆積し、1mほどの厚さで谷を埋めつくしている。調査部では、この廃棄物層をすべて持ち帰り、2mメッシュの篩にかけて水洗し、内容物の分析作業を続けている。その量は土囊十萬袋に達するが、通常の発掘では見落とされがちで、微細な遺物の発見が相次いでいる。古代の産廃は、当時の技術の解明に欠かせぬ情報を内包した宝の山である。



飛鳥池遺跡の全景

工房のテラスに密集する炉跡群は、炭や焼土を含んだ土で整地を繰り返して築炉しており、二百基以上の炉が複雑に重複する。作業面には覆屋の柱穴や、水切

りの排水溝、作業用の土坑、金床石などが配置されている。飛鳥池工房の調査で最大に注目を集めたのは富本銭の発見である。この銅銭は、遺構の層位関係や共伴遺物によって、铸造年代が七百年以前に遡ることが確認された。『日本書紀』には、和同開珎の発行を遡る二十五年前、天武十二年（六八三年）に「今より以後、必ず銅銭を用いよ」という詔がある。

た銭の破片が大半を占める。方孔や輪の周囲に鋳バリが、輪の一部に堰の切断痕が明瞭に残る。完形品の径は平均二四・四mm、重量四・二五～四・五九g、厚さ一・五mm前後で、中央に約六mmの方孔があく。成分分析により、銅を主成分にアンチモンを四～二五%含有し、微量の銀や砒素を含むが、錫や鉛をほとんど含有しないことが判明した。遺跡からはアンチモン鉱石である輝安鉱の出土もあり、富本銭の铸造用に意図的に銅・アンチモン合金を使用したことがわかる。

本年四月から着手した炉跡群の調査では、富本銭の铸造に係わる一括遺物を投棄した二基の土坑を発見した。土坑からは、富本銭とともに鋳型、ルツボ、羽口、鋳棹、堰、鋳バリ、溶銅、銅滓、木炭などがまとまって出土し、富本銭の铸造工房の様子や、铸造規模、製作工程をより具体的に復原することが可能になった。鋳型は細片化が著しいが、三千点を越え、打ち落とされた鋳バリの数も千点近い。特に五kg近い銅・アンチモンタイプの溶銅の出土は、富本銭の量産化を物語る貴重な資料である。



工房で作られた銅製品

以上のように、飛鳥池工房の調査結果は、武蔵国秩父郡の和銅産出を契機にわが国最古の貨幣「和同開珎」を発行したとする通説を覆すものである。遺跡からは銅板の切り屑や溶銅が大量に出土しており、七世紀後半の産銅量が既に一定の水準に達していたことを雄弁に物語る。これらの銅の産地同定や採鉱・冶金技術の解明も、今後の大きな課題となるだろう。



奈良国立文化財研究所
飛鳥藤原宮跡発掘調査部
考古第二調査室長
松村 恵司